

詩人採用一個適當的意象可以喚起全宇宙的形形色色來。

Rimbaud 曾用「母音」為題做過一首十四行詩。由「i」音聯想到紅色，鮮血和美女的笑容，「i」音不過是一個燦火線，深紅，鮮血，朱胃的笑容是由這燦火線所迸發出來的光輝四射的意象世界。

詩的微妙往往在聯想的微妙，這個道理我們在中國詩裏也可以看出，例如李賀的「正月」

上樓迎春新春暉 踏黃著柳宮漏遲 薄薄淡靄弄野姿 寒綠幽風生短絲

錦林曉臥玉肌冷 露臉未開對朝暝 官街柳帶不堪折 早晚菖蒲勝縮結

八句詩把整個的早春景象描写得淋漓盡致，它的每個意象似乎都經過推敲求的，用意在用不同的富於代表性的事物刺激各種感官都覺得眼前是正月天氣。我們眼睛看到的是暗黃，淡靄，寒綠，短絲，剛發芽的柳，露臉未開的花，和還不能打縮結的菖蒲，皮膚所感到的是幽，曉臥的冷，和薄薄淡靄以及「露臉未開對朝暝」的整個的秀麗空氣。寫早春，尤其是寫宮中早春，祇能著重視覺，感覺和溫度感覺，因為鳥鵲還未開始歌唱，聲音也容易打破遲遲早春的清寂，幽寒的風味。我們祇曉到遲緩的宮漏，但是在詩本身的音樂中，也彷彿覺得早春的情趣畢竟還是可以用耳來領略。祇玩味「薄薄淡靄弄野姿，寒綠幽風生短絲」兩句，你如果祇見到顏色，感到氣溫而聽不見什麼，你就失去的許多的美妙。這種聲音的影響雖不易分析，但是細心總可以覺得出來。也許前一句的輕脆淡遠的風味是由「薄薄」疊字，首六字全用仄聲，以及「靄」「野」兩個柔和而響亮的上聲所傳出來的，後二句的紆遠、陰森，幽靜的風味是運用「幽」「風」「生」「綠」四個陰平聲所傳出來的。

（このあとに江さんの説明がある。）

……肝心なこの本の正体がわかりません。「看」とも「編」ともありますが、少し古い文献

の詩は集めたいに見えました。が、まだよく読んでいません。西洋・東洋をこっちゃんとしてあるので、何だか、軽いような重いような、アメリカで書いた本かしらとも思います。発行日もなければ、著者紹介もないのです。……

▲雑記・78V 牽強附会の大会

1975.4.23

122

草森紳一「李長吉伝・垂翅の客」が『現代詩手帖』に連載されはじめたのは一九六五年九月、翌年十一月までに十四回出て第一部を了した。一九七〇年一月から第二部がはじまり、一九七五年四月でその三十二回に達し、第二十八回からは「婦人の哭声」と副題し、「河南府試十二月祭詩」の批評がつづいている。わたしは「草森評伝」と、簡稱するこの長大な作品は、李詩を受験する人に、反検と索引とを同時に起こさせるのではないか、と思う。草森文の新しさや強さはそこにあるだろう。「李詩伝」以外の作品についても、それを感じる、いずれ、やや詳細な感想を書きたいと思っているが、ここにはⅡ・29から少し抄出する。

……語というものは、同心円的な輪状の洞窟であって、限りない深さをもっている。作者の力柄によって、意をこめただけ深くなり、作者の背後にある体験の質量に従って、意をこめなくとも語は勝手に深くなってくる。

この深さの中に手をつっこむのが、解釈である。その人の手の光りに応じた解釈が生まれるだろう。ということとは、どちらに転んでも牽強附会の大会だと言うことであり、問題なのは、その牽強附会が、自らとれだけの深さの洞窟になって戻っているか、という賭けなのである。詩に向って穴を掘れば、穴の外に掘られた土がとれだけ盛りあがるのではなく、とれ

だけの穴が、その詩と向いあわせに掘られたかということなのだ。

これは作品とその解釈との関係の重要な一面を、的確に照射している。「解釈」がどこで学問になりうるか、と考える人は、満足しないだろうが、「解釈」がどこで文学となりうるか、と考える人は、この意見に同意するだろう。草森解釈が李賀詩と向い合わせに掘る穴を期待する。

▲雑記・79 V 蠶 青 蛾

1975.4.24

李賀「夜坐吟」に「西風羅幕生翠波、鉛華^文空^文蠶青蛾」の句がある。この「青蛾」を樂府詩集・朝鮮本・官板・王注などみな「青蛾」とする。だが北宋本の「青蛾」が正しいだろう。

宋の呉曾の『能改齋漫錄』卷三に「蠶青蛾」と題する一条がある。

杜子美の「一百五夜对月詩」「想像擊青蛾」とある蛾は眉のことだ。流布本の多くが「蛾」とするのはよくない。だから杜の江月詩にまた「誰家挑錦字、滅燭翠眉蟬」という、根柢としうる。また沈約の詠月詩に「高楼切思婦、西園遊上才」といい、庾肩吾の望月詩に「楼上徘徊月、窗中愁思人」といい、隋の董思恭の詠月詩に「別客長安道、思婦高楼上」という。だから杜子美の江月詩にも「江月光于水、高楼思殺人」というのだ。

ここにあげる杜甫の詩は『分門集註杜工部詩』(四部叢刊)によると、一百五日夜对月入無家对寒食、有淚如金波、斫却月中桂、清光亦更多、此辭放紅蕖、想像喚青蛾、牛女漫愁思、秋期猶渡河、江月入江月光於水、高楼思殺人、天邊長作客、老去一雲巾、玉露團清影、銀河没半輪、誰家挑錦字、燭滅翠眉蟬」

「斫却月中桂」には、賀の「李憑箏篋引」の「吳質不眠倚桂樹」を想起する。これも吳曾によ

れば、かれの茶蔵の唐の韻陶の編した社詩には「折尽月中桂」とするそうである。

▲雑記・80V

能 改 斎 漫 録 (上)

1975.4.21

唐宋の詩文を読むとき、手もとにおいておくとか教えられることの多い本だ。わたしのも、てい
るのはい九六〇年中華書局発行。「出版説明」のいうように「考訂失実」のところは少くないか
ら鶴のみにはできないが、その点では正史だって同じことだ。いま、李賀とかかわりのありそう
な条を書きぬいておこう。

鷓夷子皮 卷一

王観国学林新編論鷓夷子、引史記伍子胥伝及宓劬注、及前食貨志類師古注云：「自号鷓夷者、言
苦盛酒之鷓夷、多所容受、可卷懷、与时張弛也。鷓夷皮之所為、故曰子皮。」又引陳遵伝載揚雄酒
賦曰：「鷓夷滑稽、腹大如壺。」然則范蠡自号鷓夷子皮、又号陶朱公、託詠名以自晦其迹耳。以上
皆王説。予按、墨子曰：「孔子忌景公之不封己、乃樹鷓夷子皮于田常之門。」孔叢子舊作詩墨曰：
夫樹人、為信己也。孔子適齊、惡陳常而終不見、常病之。又陳常弒其君、孔子沐浴而朝、請討之。
其終不樹子皮審矣。」此孔叢子辯孔子不樹子皮之義也。以是知鷓夷子皮又見于孔子、不独范蠡也。
宋の王観国には『学林』十卷があり、『湖南叢書』に収める本は孫文登の「考証」一卷を付録す
る。また清の俞樾に「説王観国学林」一卷があつて、『春在堂全書』に収める。いずれもまだ見て
いないので、ここにいう新編をそのうちに念むかどうかを知らない。

鷓夷子については『儒林叢書』に収める『詩寄余筆』下、『南柯余編』卷之中を参照。

歎称婦人 卷一

晋吴声歌曲，多以「儂」对「歡」，詳其詞意，則「歡」乃婦人，「儂」乃男子耳。然至今吳人稱儂者，唯見男子，以是知歡為婦人必矣。懊儂歌云：「澄如陌上鼓，許是儂歡婦。」又云：「我与歡相憐。」又云：「我有—所歡，安在深閨裏。」又華山畿云：「觀若見憐時，棺木為儂開。」又說曲歌云：「思歡久，不愛独枝蓮，只惜同心繡。」又云：「憐歡敢喚名，念歡不呼字。連喚歡復歡，兩誓不相棄。」予後讀通典，見序常林歡云：「江南謂情人為歡。」然後始恨說書之寡。

情人為歡といふのは正しいが、歡為婦人必矣といふのはあやまりで、ここに引かれた「華山畿」の歡は男で儂は女だ。拙稿「愷公」「中国名詩選」にすこしそのことを書いてある。

錢塘蘇小小 卷一 (付 吉川幸次郎述「中国文学史」)

劉次庄案衍解題曰：「錢塘蘇小小歌。蘇小小，非唐人。世見樂天、夢得詩多稱詠，遂謂与之同時耳。」次庄雖知蘇小小非唐人，而無所擬。予按，郭茂倩所編引宏韻曰：「蘇小小，錢塘名倡也。蓋南齊時人。」西陵在錢塘江之西，故古辭云：「何外結同心，西陵松柏下。」

蘇小小については、宋の龔頤正「芥隱筆記」(顧氏文房小説)蘇小小。明の楊懋「升庵詩話」卷二、大邪、卷六、松下。郎英「七修類纂」蘇小小育二人。清の張宗櫛「詞林紀事」卷二十、元好問虞美人注などに關聯記事がみえる。けれども、李賀の「蘇小小歌(墓)」を味わうに必要な知識としては、吳曾の記事に尽きる。といって、さしつかえない。蘇小小は、男が女に対して、知識の深部にいる不思議な一人の女性なのであって、その人は詩の中でさがす行が見出だせない。權力に迎合する史家や文人の書きものに、その真の姿は現れず、權力の規範を中心とする倫理のうちには、影々えみせない。その蘇小小を歌ったとき、李賀は、孔子の礼樂を超えたのだ。孔子のイデオ

ロギーを批判することは、困難ではあっても、できないことではない。その感性を批判し、のり超えることは、はるかに困難であるはずだ。

吉川幸次郎述「黒川洋一編『中国文学史』第一章にいう。

……この国にあっては中庸、つまりバランスということが最高の倫理であり、何事によらず一方的に偏したものはいけないという考えが強かったのである。従って過度に抒情的なものが発生しても人々はつねにそれに危惧を感じた。唐の詩人に李賀（長吉）という人がある。その人の詩に「蘇小小墓」（蘇小小の墓）というのがある。……この詩は今日のわれわれが考えやすい詩の平均と非常に近いように思われる。しかし中国自体の批評は、この詩をかならずしも最高の詩とは考えない。それはこの詩が美的感動のみを目ざして、倫理的な感動に欠けるからである。

この文学史は過去の中国の文学批評の基準を示すことに努力し、成功した作品だと思ふ。その基準は、孔子のイデオロギーと感性であって、そのことは前引の短文中の「中庸」という語に示されている。孔子主義の批評基準が、賀の「蘇小小墓」を人美的感動のみを目ざして、倫理的な感動に欠ける所作と見てきたことはまず間違いないことである。だが同時に、賀の「蘇小小墓」にならわっている倫理的感動に不感無覚であったところにこそ孔子主義基準が批判されなければならぬ中心がある。孔子主義の中庸とは、天子を中心とする特権的官僚集団内のバランスであって、優儒侏儒や表狄が自分と同じ人間だという視点が抜け落ちていく。李賀もまた特権集団内の一官吏であったが「蘇小小墓（墓）」を作ったとき、孔子主義を批判し、のりこえたのだ。

こんら、中国では孔老二批判が精力的に進められているが、管見の及んだ範囲にかぎって、
えは、イデオロギー批判においてほどは感性批判において鋭くないのではないか。ぜんねんな
から李贄の「蘇小小歌（墓）」を孔子主義批判の観点から見直そうとする動きはまだないよう
ある。

だが、最も轟められるべきものが、李贄の名をかぶせた雑誌を出しながら「蘇小小歌（墓）」
の徹底的な注解を展開できずにいるわたし自身であること、いうまでもない。

「死者」として生者の世界から追われた人たちがわたしに呼びかけ「怠るな」と励ましている。
一九五三年、わたしは「筆補造化天無功」（方向2）で次のようにいった。

八世界が原爆の恐怖の下におかれた今日の事態は、われわれの生を死者の魂と化する。この呪
縛を破る……道はただ一つ、事物もしくは事実の中にとじこめられた声を聞き、これを理解すべく
努めるほかにないであろう。中夏の人たちにおける天も、それが観念の呪縛となると、これに
矛を向ける事実があらわれるであろう。われわれは新中国の人々に死から甦った魂を見ないであ
ろうか。

それから二十年たって、中国では、無数の死者の魂が甦ったが、蘇小小はなお墓のなかにとじ
こめられ、そのふるえる歌声はまだ呪縛から解き放たれていないのだ。わたしは政治に関しては
国家の消滅を夢想する痴愚にすぎないから、国家としての日本にも中国にも興味はない。ただ、
げんに日本も中国も国家という形をどうすには今の世界では存立しえない事情は理解する。そう
して、その事情が蘇小小を墓に閉じこめる呪縛と、同じところから来ているだろうことを、か

すかに感じるのである。

1975.4.27

正 誤

(頁数は通巻のそれ。「正」↑「誤」)

- 661・12「読み始めたのは」↑「読み……たのは」 664・4「死セリ」↑「死……」 14「白玉ノ虹」↑「白玉……虹」 668・13「高祖と太宗」↑「高祖 太宗」 675・10「新・旧『唐書』」↑「新・旧唐書」 684・2「擁立する」と宣伝したため、河北の」↑「擁立する……河北の」 685
- ・末「山西省の繁峙県の」↑「山西省の……県の」 688・6「訴之んや」↑「訴之んや。」
- 689・16「坑道(あるいは壘壕?)」↑「かけはし」 691・17「太子軍」↑「大軍軍」 692・3「橋がくずれた」↑「橋がくずれた」 695・6「太宗が」↑「太宗か」 696・1「冬にかけてのある時期に、」↑「十二年の春にかけての、ある時期に、」 696・11「十二年までの間での、あしかけ三年」↑「十二年まであしかけ三年」 16「昭義節度使」↑「昭義節度」 367・3「郝氏の父」↑「郝氏父」 4「成徳節度使」↑「成徳節使」 698・8「士美が柏郷を下した」↑「士美が柏郷が下した」 12「だが」↑「だが」 15「下した」↑「下した」 701・7「結節点で輝いている」↑「結節点で……いている」 705・15「李樹桐」↑「李樹」

後 記

婦人の助けと励ましで始まった本号は、蘇小小にぶつかって頓挫した。この号を幽明両界の婦人がた、ならびに女神信仰の研究に半生を費された小林景愛博士に捧げる。